

Column 3 カリキュラム・マネジメントとは

■全教職員が一体となって取り組むカリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントとは、社会に開かれた教育課程の実現を通じて子どもに必要な資質・能力を育成するために、各学校が校長のリーダーシップの下、学校教育目標実現を目指して、子どもの姿や地域の実情等を踏まえて教育課程を編成し、それを実施・評価していくことです。

カリキュラム・マネジメントの実現に向けては、校長を中心に、学年や分掌の枠を越え全教職員が、カリキュラム・マネジメントの必要性を理解し、一体となって取り組んでいくことが重要です。

取組としては、教科等の内容や授業について、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら、見直しや改善を図ることや年間指導計画や授業時間、週の時間割の在り方等について、学習指導要領の趣旨や枠組みを生かし、子どもの姿や地域の実態と関連付けながら、校内外の研修等を通じて研究を重ねていくこと等が挙げられます。

このように、カリキュラム・マネジメントは全教職員が参加することによって、学校の特色を創り上げていく営みです。

■カリキュラム・マネジメントの三つの側面

カリキュラム・マネジメントについては、「社会に開かれた教育課程の実現を通じて子どもに必要な資質・能力を育成する」という新しい学習指導要領の理念を踏まえ、次の三つの側面が示されています。

- ①各教科等の教育の内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月

各校種の具体的な取組については、Column 4～6 において、カリキュラム・マネジメント取組事例として、答申で示されている三つの側面に合わせて次のように紹介します。参考にしてください。

- ① **教科横断** 教科横断的な取組・・・Column 4（P 89） Column 5（P 105） Column 6（P 122）
- ② **PDCA** PDCAサイクルの確立・・・Column 4（P 89）
- ③ **資源活用** 地域人材・資源の活用・・・Column 4（P 89） Column 6（P 122）

■何から始めるか？

カリキュラム・マネジメントの充実のためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善が欠かせません。それは、「主体的・対話的で深い学び」を授業時間内において実現させるには、その1時間が単元の中でどのような位置にあるのかという単元構成を抜きにして考えることはできないからです。1時間の授業や単元構成、年間指導計画が、すべての教科等においてどのように配列され構成されているかを俯瞰することは大切なことです。単元構成や年間指導計画が学校教育目標とどう関わっているのかを考えながら、全教職員の共通理解の基に、授業改善を進めることが子どもに必要な資質・能力を育成していくことにつながります。



また、学校には、道徳教育や総合的な学習の時間、特別活動等様々な教育活動の全体計画があります。まずは、それらを整理するところから始めてみましょう。その全体計画が学校教育目標とどのようなつながりがあるか、そして教科横断的な視点で授業との関連性のある活動になっているか、検討してみることが始めの一步となります。

さらに、新学習指導要領の総則の内容を各学校の教育活動に照らし合わせて見直すことも挙げられます。具体的にどのような視点で見直すか、次の4点を参考にしてください。

- 学校教育目標と各教科等で育みたい資質・能力のつながりを捉え、各学校の目指す子ども像が育成すべき資質・能力につながっているのか。
- 環境教育、キャリア教育、プログラミング教育などの教科横断的な視点に立った資質・能力の育成とのつながりをどう捉えているか。
- 子どもの発達段階を考えた教育課程の編成が図られているか。学年や学校段階での接続、つながりを考え、スムーズな教育課程の配列が示されているか。
- 家庭や地域社会との連携・協働を目指した教育活動の実施内容について、地域一体となって子どもを育ていこうとする連携が図られているか。

(平成29年度カリキュラム・マネジメント指導者養成研修講義より)

■どのような手を打つか？

上述のような見直しは、校内研修等において全教職員で行うことが大切です。そして、様々な方法で改善を図ることが求められます。

次の内容は、ある学校の教育計画を基に学校教育目標や教育課程を見直した研修実践です。

カリキュラム・マネジメントの視点から、A中学校の環境教育全体計画を見直しました。世界自然遺産登録を目指す豊かな自然に囲まれるこの学校では、子どもは地域とともに美しい土地を残すための活動を行っています。しかし実際には、子ども主体の活動になっていなかったり、学校教育目標と環境教育の目標が繋がっていなかったりという課題点が指摘されました。

そこで、普段の教育活動からどのような意識をもたせるのか、そして、具体的にどのような目標を定めていくのか、子ども、教職員、そして保護者地域との連携推進のために、どのような取組ができるのか、良い点、課題点、そして改善案を挙げながら話し合いを進めました。

特に、日々の学習活動において教科横断的な視点でどのような取組ができるのかについて着目しました。環境教育を総合的な学習の時間に留めることなく、教科の学習でも環境教育に関わる具体的な取組について意見が出されました。国語科では、環境問題に関する書籍を読み、それについて討論する活動、社会科では、世界自然遺産について調べ、その地域での取組をレポートにまとめ発表する活動などが挙げられました。また、学校の中だけでなく、地域と積極的に関わる活動についても多くの意見が出されました。

このように、各学校の子どもの実態や地域の状況に合わせ、管理職や教務主任を中心に、各学校の教育課程を見直します。そこに全教職員も関わり、共有、役割分担し、相互に連携しながら、教育活動を進めていきましょう。



教育計画を見直した振り返り演習の成果物